

「らしさ」追求の地域づくり

～ 自立・協働・ネットワークのなかで ～

Regional Development in Pursuit of Local Characteristics
—— Focusing on Independence, Collaboration and Network ——

鈴木 裕 範
Suzuki, Hironori

ABSTRACT

Efforts are being made to cultivate and utilize indigenous resources for regional development in municipalities throughout Japan, by revaluating and preserving their historical environments and cultures to generate ways of revitalizing their local communities. These efforts have already encouraged new businesses and stimulated tourism and local economies. “Culture” and “Environment” have now become the keywords for regional revitalization.

Overcoming the general decline in local economies, depopulation and a graying population, some regions are quickly restructuring their local communities. Countering the trend to ever-larger administrative units in a world where globalization is progressing at an increasing rate, they are rebuilding the foundation for production and living to strengthen the local potential.

What is significant in these efforts is that the local people and communities are taking the initiative and, teaming up with the administration, advancing toward the revitalization of their regions.

This paper introduces examples based on research conducted throughout the country. While explaining the current situation and the challenge of sustained regional development that cultivates indigenous resources, it discusses the efforts in terms of “independence” and “collaboration.”

はじめに

「地域固有の資源」を掘り起こし、地域づくりに活かす取り組みが、いま全国各地の市町村で展開されている。歴史的環境や文化にあらためて注目し、保全しながら地域の再生に結びつけていこうという取り組みが、それである。起業を促し、観光・地域経済に活力を与えている例もある。「文化」と「環境」は、地域再生のキーワードになっている。

地域経済が疲弊し、過疎化・高齢化が進むなかで、いち早く地域コミュニティの再構築に取り組んでいる地域がある。政治・経済の広域化、グローバル化が加速するなかで、生産、暮らしの場をととのえ直し、地域力を高める活動だ。

そして、それらの取り組みに見出すことができるのは、住民あるいは自治体がみずから考え、住民と行政が協働し、地域再生へと歩みだしていることである。

本論文では、全国各地における調査研究にもとづいて、いくつかの事例を紹介しながら「地域固有の資源」を掘り起こす地域づくりの現状と課題を明らかにするとともに、「自立」と「協働」の観点から地域づくりの取り組みについて論述する。

伝統的な知恵と技術を守る先に見えるもの

～宿場町の町並み保全と地域コミュニティの再生～ 愛知県・足助町

月見の会の膳は、足助らしさに溢れる

2003年9月11日、足助町にある香嵐溪に向かった。会場の三州足助屋敷前広場までの道は、巴川の瀬音を聞きながら、青い紅葉の林を抜けていく。年間多くの観光客でにぎわう景勝の地は、錦秋の季節にはまだ早い。暮れなずみ始めたころ、道の両側に灯がとまり、いくつものろうそくの火がゆらめく。

会場の正面は大きな花瓶に生けた秋の草花で飾られ、これもまた特別に大きな白い重餅がそなえられている。餅は、最後に抽選で出席者に贈られるのだ。

一列 10 メートルあまりの長机が三列、客人のための料理が並んでいる。午後 6 時 30 分、はっぴ姿の主催者がマイクの前に立った。足助町の月見の会の開宴であった。



月を待ちながら食を楽しむ

月見の会は 2003 年で 8 回目を数える、企画の質の高さと趣向で評価が高い。主催は「AT21 倶楽部」, 「A」は足助町の頭文字, 「T」はツーリズムの最初のローマ字である。地元の住民らでつくる地域づくり団体だ。夏が終わり、秋が深まり香嵐溪が錦繡で彩られるまでの季節、この町を訪れる観光客の足がとまる。清流に水浴びの若者や家族連れなどが遊び、紅葉狩りのひとが訪れるまでの、この町のもうひとつの仕掛けが、この月見の会だったのである。写真は、その日の一の膳で、資料は献立を複写したものだ。

一の膳			二の膳			三の膳		
きぬかつぎ	うざく	こも豆腐の煮物	いりうの花	鳥胸肉の白味噌漬	野菜寿司	巻寿司	ガリ	数物
ちしやばくん	わさびの葉	五反田塚田	こもでの金	百年草	まる入	小松屋	おちべ	白雲館
担当	香嵐亭	足助屋敷	花の木	巴水館	玉田屋	小松屋	五平餅	漬物
減塩梅干	月見団子	兼楓亭の豆乳の和風プリン	口口屋	加東家	風外	あなのはまれ	足助屋敷	寒茶
竹酒	寒茶							

上が料理名、下は調理した店の名である。五平餅は、ご飯を搗り粉末でこねて杉板のうえにのばし、それに味噌をつけて焼いたもので、味噌の味付けが“みそ”なのだという。山仕事をするひとたちが山の神にそなえた食べ物は、わらじの形に似ているところから「わらじ五平」と呼ばれる。三河奥から飛騨、信州な



月見の会のお膳は地産地済

どでしきりにつくられてきたこの伝統食をはじめ、土地が育んできた食が並ぶ。食材はほとんど地元で調達し、用いる。地産地消、である。巻きずしは「ハレ」の日に食べるご馳走で、筆者には素朴ななかにも上品さがあって美味であったが、作り手である宿の女将は「ずいき」が手に入らず、

代替品の「干瓢」で巻いたのが口惜しそうだった。宴では、各膳の料理と制作者、食材提供者の名前が紹介されるのである。「メンバーは半年以上も前から知恵を絞り、考えるのです」、と矢澤長介町長から聞いた。

料理を盛るのは、竹で編んだ籠である。器も竹である、青竹を自在にカットして作った器は、そのまま工芸品になっている（多くの参加者が、記念に持って帰った。捨てるのが惜しいと思わせるのだ）。材料は地元の竹林にある、製品に仕上げる竹細工の職人は三州足助屋敷にいる。原料の調達・加工から器製作技術まで、ほとんどすべてが地域内で自己完結している。これが、地域の力というものであり、質の豊かさである。「らしさ」とは、こういう創造的行為がもたらすのではないか。ちなみに、酒器も、テーブルキャンドルも、竹細工を用いていた。

そうして一の膳から三の膳まで、参加者は料理を味わい、酒を飲み、音楽を聴き、会話を交わしながら、月が昇るまでの時の経過を楽しむのである。月見の会は香嵐溪の山の端に月がかかる、午後8時30分頃まで続いた。

月見の会の参加費は一人3800円だが、県内外から参加申し込みがある。募集は100人あまりで、定員になりしだい締め切る。参加者の6割から7割は女性である。若い人もいるが、50、60代が中心である。つまり、食それだけではなく、舞台設定や演出にも目が肥え、イベントの「質」にきびしい世代である。月見の会の成功は、彼女たち女性の強い支持を得ていることが、最大の要因かも知れない。

この初秋の夜の会は、足助という町の地域づくりの歴史と土壌があって、初め

て生まれたイベントである。地元住民、観光客らを迎え、ともに楽しむ住民の力を知る月見の会である。

イベントの成功は、地域住民に受け入れられるか否かだ

「足助は、2月が一番忙しい」、と土地の人は言う。毎年2月10日から3月10日までのひと月に、足助は約5万人の観光客でにぎわう。その時期の観光といえば、一般的には観梅である。ところが、ウメの名所ではない土地に、それだけ多くのひとが繰り出し、町中に人並みがあふれる。「中馬のおひなさん」を一目見にやってくるのだ。

「中馬のおひなさん」は、各家がそれぞれの家にある雛人形を店先や玄関先に飾り、公開するまつりである。歴史的な町並みを活かした取り組みを、と考えた住民たちの手で始まった。1985年、昭和60年頃のことだ。

当初参加したのは、20軒くらいの家だった。それが、40から50軒に増えた。そして、2003年春には、雛人形を飾る家は約120軒となった。足助の町の2キロから3キロの間に、それだけの雛の家が出現する。華やかで可憐な雛人形が店先などに飾られ、まつりは山里に春のことぶれを告げる。

地域にある固有の資産、地域資源に着目したのが、中馬の雛まつりだったのである。この町で、住民の間に生まれている動きのひとつだ。「既成のものにとらわれない、民間の自由な発想」がある。そうした動きの背景には、行政主導で進められてきた、この町の長い地域づくりの歴史がある。

「塩の道」中馬街道の宿場町足助

足助町は、愛知県東北部にある人口1万人あまりの町である。トヨタ自動車の企業城下町豊田市から車で1時間足らず、豊田市との市町村合併が予定されている。トヨタの社員の間には、退職後の人生を送る場所に、この町を選ぶひとたちがみられる。

足助町は、太平洋岸と中部山岳地帯の地方をむすぶ交通の要として、古くから

開けてきた。現在の国道 153 号が、伊那街道あるいは飯田街道、そして中馬街道と複数の呼称で呼ばれてきたことに、往時の繁栄、にぎわいを偲ぶことができる。地名が語るように、道は、足助から信州にと通じており、その上を、ひと、モノ、文化、情報が行き交った。

足助から信州に運ばれたのは、塩である。太平洋岸の地域で産出した塩は、足助を経て山深い信州へと届けられた。信州からの荷は、年貢米や山村の産物、たばこなどであった。中馬街道は、「塩の道」であった。中馬とは、「中継馬」のことである。物資の運搬に従事したひとたちの手で、文字通り馬の背に乗せて荷を運んだ道が、中馬街道だった。足助の町中に、頭の上に馬頭をのせた馬の守護神・馬頭観音を多くまつる理由は、この土地のそうした来歴による。宿場町足助の町は海と山の文化が出合う、“十字路”でもあった。

足助のひとたちは、そうした歴史が息づくまちなかに暮らす。この土地を訪れるひとたちは、白壁と黒い板塀のコントラストが美しい町並みをたどりながら、江戸時代後期に建てられた町家がつくる景観が、ひとびとの暮らしの場として維持されつつ、観光資源、地域資源として生かされていることに気づくのである。歴史的な景観、文化的な遺産が、標高 100 メートルから 700 メートルの中山間地域である町を、特色づけている。この町がこんにちも取り組んでいる地域づくりの成果である。

暮らしのなかに溶け込む歴史

足助町は、町の中心部を 2 つの川が流れる。巴川とその支流になる足助川である。古い町並みは、足助川兩岸に 2 キロあまりにわたり続く。角を曲がると、もうひとつの風景がまた現れるのは、川に沿って形成された集落が「曲がり角」の多い町並みにしているためだ⁽¹⁾という。

西町に唯一軒残る宿屋がある。木造 2 階建て、旅籠の面影が色濃く残る。宿屋の名前は玉田屋、創業は江戸時代だと聞いた。間口 2 間ほどの玄関の戸は、引

(1) 足助町観光協会『新・三州足助』p53

き戸である。なかに入ると、たたきになっており、上がり口の土間は手入れが行き届いているとみえて、黒く光っている。客室は2階で、階段は幅が広い。「築200年です」と女将が教えてくれた。明治から大正時代にかけて、西町にはこの玉田屋をふくめて数軒の宿屋があり、芝居小屋や飲み屋などもあった。西の出入り口として発展したのが、西町だった。⁽²⁾



街道の面影とどめる玉田家旅館



マンリン小路の町並み

新町は、町家が残る町並みである。狭い間口の家、土蔵をもつ家。マンリン小路は宗恩寺へとつづく坂道で、白壁と黒い板壁の蔵がある道である。坂道の登り口、角に建つマンリン書店は白壁塗りの建物で、通りに面したスペースは書店、奥がギャラリーと喫茶室になっている。ギャラリーは蔵を改装したもので、陶芸家の作品などを展示し、書店の棚には足助をはじめ郷土出版物がならび、情報の発信基地的な役割を果たしている。活字、陶芸、音楽など芸術文化を大切にしたいという女性経営者の意図が感じられ、観光客にはいくつもの情報にあふれた交流場所であり、地元のひとたちにとってはサロンのような役割を果たしている。

本町は大きな町家が見られ、異なる建築様式が江戸時代以降の時代の変遷を教え、建築物の“フィールドミュージアム”的な効果をあげており、和菓子の老舗、古い建物を再利用した喫茶などの店が並ぶのもこの付近である。

この町をもうひとつ特色づけているものがある、川である。街道に面して建

(2) 足助町観光協会『新・三州足助』p60

つ家のなかには、家の裏手から川に下りる石段のある家が多い。擦りへった石から洗濯をしたり、紙漉きがおこなわれていた時代の記憶をたどることができる。足助川は、ひとびとの生活の場を流れる川としては、美しさを維持している。足助の町の魅力は、旧街道が通る古い町並みと、川が一体になって景観をつくりあげている点にある。

ところで、町並みを保全するにあたって、行政は条例の施行などで規制する方法はとらなかった。ひとの生活の匂いが消える、と考えた結果だ。匂いがない町並みは無機質で、どこか博物館的である。町並みの良さは「たたずまいだけではない。住んでいる人がいての町並みだ」、行政はこれを町並み保全の基本理念とし、住民は修理や保存にあたった。足助の町並みが、映画のセットのような印象を与えないのは、ひとの日常の暮らしがいまも営まれ、建物が記憶するひとの時間が流れているからである。この町を観光で訪れるひとは、年間 220 万人を数える。

過疎化のなかの地域再生

足助町で地域づくりが本格的に始まるのは、1970 年代前半である。1970 年（昭和 45 年）、過疎地域に指定された地域の内側から、地域再生に向けての取り組みは始まる。全国の地方という地方で過疎化が進行し、開発と破壊の嵐が吹き荒れる時代であった。田中角栄首相が日本列島改造計画をひっさげて登場してくるのは、1972 年である。この政治家を、マスメディアも国民も「今太閤」ともてはやしたところに、当時の時代状況が表れている。

町と住民が足もとに目を向けたとき、自分たちの生活の場で、宿場町の面影をいまに残す古い建物と町並みに気づいた。そのままにしておけば、ほかの多くの町がたどったように、開発や建て替えにより消えていく可能性がある建築群であった。ひとびとが、「歴史的環境の破壊を現代の環境問題の重要な課題として認識」し、「歴史的環境を地域住民の精神的連帯のシンボルとしてとらえ、その消滅が住民のうえに、いかに深刻な影響をもたらすか、ということを知るよう

になった」のは、70年代後半から80年代にはいつてからである。長野県・南木曾町の妻籠宿の保存・再生の取り組みはその先駆的な活動として知られるが、足助もまたひとつによって「認識」された町だったのである。

足助町の中心部、飯盛山のふもとに三州足助屋敷がある。約3,000平方メートルの敷地に山里の農とその暮らしを再現したものだ。モデルは明治時代におけるこの地方の上流階級の家で、草葺きの長屋門に母屋、土蔵があり、牛小屋がある。牛や鶏が生活し、水車が回っている。そして、もっとも大きな特徴は、ここが「手仕事」の職人たちの仕事と生活の場だということなのだ。

かつて、農村には農具などをつくり修理する野鍛冶と呼ばれる技術者がいた。ふいごに風を送り込む鍛冶職人がいる。木で生活用品をつくる木地屋がいる。高齢者が獲得した技術を発揮できる場がここにある。開設まもない時期から働くひとがあり、職人の世界に“とらば一ゆ”したひとがいる。リタイアし、第二の人生をモノづくりに求めたひとがいる。男性だけではない、竹細工を編み、和傘張りをする若い女性がいる。

この職人屋敷が開設されたのは、1980年4月である。手仕事や暮らしを再現し、むかしから使われてきた道具を使いこなす技術を残したい——、モノづくりの技と文化の継承が目的だった。手間ひまをかけ、ひとつひとつ作られる製品は、大量生産・大量消費・大量廃棄、手軽さや効率とは対極にあるものだ。伝統の知恵と技術を見失った先に、どのような社会があるか。その答は、すでに見えている。「いまは、再生産がきかない時代になりつつある。わたしたちが掲げたのは、自給自足の大切さを知ることだったのです」と町役場の幹部は説明する。現代の暮らしのあり方や労働の意味を問う、現代社会へのアンチテーゼの意味を有しているのがこの施設なのである。

経営は独立採算である。足助屋敷は、この町の代表的な観光スポットとして観光客に人気があり、年間入館者は平均約15万人を数える。年商5億円、雇用

(3) 木原啓吉『歴史的環境 ―保存と再生―』p ii

(4) 足助町観光協会『新・三州足助』p31

人員は約 45 人、文化経済両面からも地域を支える。

町は、資料館・足助中馬館を 1982 年に銀座通りと呼ばれる田町の旧街道沿いにオープンさせた。館内には商業・金融・交通関係などの資料を展示、街道の町の経済活動の歴史を資料から学ぶことができる。建物はもと銀行の支店で、大正建築である。町並みの保全は、生活文化を保存し、伝えることでもあった。それらを可能にしたのは、「歴史的環境が地域の生活環境の形成に重要な位置を占めること」を自覚した結果である。

地域づくりは「物まねではない、自分たちの歴史をふまえたものである必要がある」、青木信行企画課長はこう言って、話を続けた。「足助屋敷を超えるものに、まだ出会っていない」。

コミュニティの再生へ。足助、もうひとつの地域づくり

足助町の地域づくりは、古い町並み―歴史的環境を活かすことから取り組まれてきた。「観光立町」のプロジェクトをいくつも押し進め、その過程で地域づくりの体力をつけてきた。「行政主導型でまちづくりのマネジメントを行い、観光事業として画期的な成功を収めて」きたのが、足助町である。⁽⁵⁾

この町に、観光客など来訪者が絶えない施設がある、百年草である。百年草は、ホテル、フランス料理のレストラン、食品工房、浴場などを備えるとともに、健康診断や在宅老人デイサービスなどをおこなう一般社会福祉施設がある。「ホテルは、一室 2,000 万円をかけた」。

足助町は、2003 年（平成 15 年）5 月現在高齢化率が 23% と、20% を超えた。そうしたなかで、町が掲げたのは「足助に住むことの豊かさを実感できる町」づくりであった。国民の 4 人に 1 人が高齢者という高齢化社会に向かっていくなかで、「元気な高齢者に働く場を提供し、生きがいをもってもらえる町に」、と 1991 年（平成 2 年）に約 13 億円をかけて建設された。

このなかに、2 つの食品工房がある。ひとつは、「ZiZi 工房」である。男性高齢

(5) 池上惇 木暮宣雄 大和滋『現代のまちづくり 地域固有の創造的環境を』p36

者約 10 人でハム・ソーセージを作っている。「どこにでもない、ここならものは何が考えられるか。ハム、ソーセージがいい、フランス料理にも欠かせない。添加物がない製品を」と考えたのだという。製造工程がガラス窓越しに見学できるようにしており、観光客の土産や歳暮・中元の贈り物製品としても人気がある。年間の売り上げは、1 億円を超す。また、女性たちのグループ「バーバラはうす」が作るパン、紅茶も好評だ。出番づくりが、高齢者の意欲をひきだし、参加意識を高めるのに役立っている。

足助屋敷の取り組みから 10 年後に百年草は開設された。福祉と観光を結びつけた複合センターが、百年草である。これにたいして、「福祉で観光をやって金儲けをして」という批判がある。しかし、町は次のように説明する。「目的は高齢者を生かす居場所づくり、百年草内の施設はそのひとつなのです」。

住民の力を育む 行政主導から民・官協働のまちづくりへ

足助町の地域づくりは、行政主導で進められてきた。そのもとになっているのが、「シャングリラ計画」である、これまで 1 次から 3 次まで実施してきた。2003 年度は第 3 次計画（平成 8 年～15 年）の最終年度にあたり、基本計画のもとで集落計画と計画を策定する。

86 ヲ所ある集落について、向こう 10 年間に展望し、環境・自然・歴史・文化・安全・安心などの各テーマについてまとめた。「地域活性化について各地区ごとの提案をしてもらおう」というのが目的だ。90 人の職員は、2002 年（平成 14 年）5 月から各集落に入り住民から課題や施策にたいする声を聞き、計画書作りへの理解を求め、信頼関係を築いてきた。当初は「行政がやることをなぜ住民に押しつけるのか」といった批判もあった。市町村合併をすると、将来的には現在ある集落の約 3 割は消えるというきびしい予測がある。

「民のなかにある力」を引きだし、行政主導型から官・民協働の地域づくりへと進んできたのが、足助の地域づくりの歴史である。その過程で、AT21 のような戦略を持って自然発生的に誕生した住民グループなどがつくられた。「民間の、

既成のものにとらわれない自由な発想」が、行政に刺激を与えつつある。地域づくり計画書の作成にあたって、住民、地域によって“温度差”があることを、役場の職員も否定しない。しかし、計画書づくりにあたって各地域の策定委員会に参加したひとはのべ9,800人、足助町の人口にほぼ匹敵する。町の担当者も住民の「意識の変化」を認めている。

また、町は「足助人ではない外のひとの力」を借りて「ネットワーク」を広げながら、展開してきた。この町にたいする外部のひとの評価が、「地元の価値」に気づかせ、掘り起こし光を当てるからである。いまでも、豆腐や和菓子など、この土地らしい食など、いくつもの特産品が生まれている。小さいけれども、起業の動きがある。

地域づくりの成功地として知られる足助町も、市町村合併計画をはじめ地方分権のうねりのなかで、集落、地域の基盤強化というあらたな対応を要請されている。集落ごとの「地域力」のブラッシュアップが求められている。「コミュニティのトレーニングは、これまでの間にもおこなってきた。その取り組みの成果を示すとき」、と矢澤長介町長は話す。「一集落に1,000万円の振興資金を出してもいい」、足助町の住んで良かったと思える官民協働のまちづくりが本格化するのこれからである。

空き家の急増・人口の減少

藍のまちの衰退がひとを動かす 徳島県脇町

うだつは、またあがる

徳島県美馬郡脇町は、吉野川の中流域にある人口約2万人の町である。霊場をめぐる四国遍路道からはずれているこの町に、年間約20万人の観光客が四国だけではなく瀬戸内海をわたり、中国、九州地方などから訪れる。中高年齢者が多いが、最近では都会からの観光客や若い世代もみられる。目的は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されているうだつがあがる民家と、そうした家々が形成する町並みである。



一階屋根の上の白壁がうだつ

漢字は、「卯建」と書く。うだつは、2階の壁から突き出した白い漆喰塗りの火除け袖壁のことで、「一階から立ち上げた袖壁の上が台上に開いていて、その上を寄せ棟屋根にしている⁽⁶⁾」。火事の際に、隣りの家からの類焼を防ぐ目的があった。地元観光ガイドのリーダー中元定氏の説明によれば、「明治以降のものは

化粧を施している」点に特徴がある。この町では、富裕な商家は競ってこのうだつをあげた。なぜならば、それは繁栄の象徴であり、力の誇示でもあった。「うだつがあがらない」の語源は、このことに由来するとされる。

脇町のうだつの町並みは、1988年（昭和63年）12月、文化庁の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。吉野川に流れ込む大谷川の右岸にある南町約5ヘクタール、長さ430メートル、80戸の民家が対象である。町並みには、江戸時代の風情が漂う。「うだつあがります」の看板が建っている。この町は、地域住民によって、ふたたび「うだつがあがる」ようになったのである。地域社会の将来への危機感と、熱意が地域を動かした。

「阿波のよさは脇町につきる」

「阿波のよさは、ひよっとすると脇町に尽きるのではないかとかねがね思ってきた⁽⁷⁾」、作家司馬遼太郎氏は、その著書『街道を行く』『阿波紀行、紀ノ川流域』で、脇町についてこう書いている。

徳島県を代表する産物に、藍がある。藍のなかでも阿波藍は、古くから最高級ブランドとして染めの原料に用いられてきた。その歴史は、16世紀終わりにさかのぼる。豊臣秀吉の家臣で阿波の国を治める蜂須賀氏のもとで、脇城代家老

(6) 吉田桂二『歴史遺産日本の町並み108選を歩く』p202

(7) 司馬遼太郎『街道をゆく32 阿波紀行紀ノ川流域』p112

となった稲田植元氏は農家に藍の原料となる藍草栽培を奨励する。そして、藩が保護政策に乗り出すなかで、吉野川中下流域の平野部は藍草の一大産地を形成していく。刈り取った藍の葉は乾燥させ、それを玉（藍玉）などにした。吉野川は、流域に洪水や氾濫の被害をもたらしたが、恵みも与えてきた。川の氾濫が肥沃な土壌を生み、その土が産業や文化を育てたのである。「阿波藍は、吉野川が生んだ最大の特産物」だった。

川を利用した舟運はながく主要な交通手段であり、吉野川の水運は阿波の経済やひとびとの暮らしを支えた。春から夏にかけて吹く風をとらえて、30石、40石の川舟が帆を掛けて下流から上ってきた。川舟は、和歌山県も含めて広く利用された平田舟である。上りの舟には、コメや塩、魚肥、海産物が積まれていた。そして、下るときには藍が積み込まれた。煙草、炭、薪などもあった。多いときには、そうした川舟が、1,000艘を数えたといわれる。

集散地となった脇町には、藍染めの原料である藍玉を染め業者に売る藍商人が集まり、幕末から明治時代を中心に栄える。この町が発展した背景には、地理的な条件に恵まれていたことがあげられる。脇町周辺は、吉野川の「湊」だった。川湊は、殷賑をきわめた。藍商人の商家が軒を連ね、店の間口は広く、家の奥は吉野川堤防まで続いていた。堤防には藍倉が建ち並び、船荷の積み降ろしがおこなわれた。吉野川の舟運を背景に賑わった町はまた、陸上では撫養街道と讃岐街道をむすぶ交通の要衝に位置していた。脇町に、数多くのうだつがあげられたのは、ひとえに藍と吉野川による。

1914年（大正3年）、徳島と池田間に鉄道が開通した。鉄道が敷設されたのは吉野川の右岸、しかも川田駅までであった。河川交通の終焉、陸上交通の時代の始まりは、藍の町・脇町の「斜陽」を意味した。「川を利用しなくなったとき即ち、交通手段が舟運から陸上へと変わったとき」から、「日本人の自然に対する発想や価値観までの変化」と「水問題の発生」を生んだ、と富山和子氏が指摘した状況がある。⁽⁸⁾

(8) 富山和子『水の文化史』p36

コミュニティ崩壊の危機が住民を動かす

江戸・明治という時代で時間を止めたようにみえたこの町に、再び時代の光が当たるのは、1980年代のことである。ただし藍ではなく、建築物・町並み保存という歴史文化遺産を活かした歴史の町、観光の町としてであった。

脇町に、1985年（昭和60年）「南町町並み保存会」が設立される。それに先立ち、町内には「脇町の文化を進める会」が結成され、商工会が「うだつの城下まつり」を開催したりとまちおこしにあたってきた。しかし、町に往時のような勢いはなく、古い町並みには空き家が目立つようになった。一時、南町の80戸の家のうち1割以上10戸ほどが空き家になったのである。空き家の増加は、町並みだけではなく地域社会そのものが崩壊してしまう一、「コミュニティの将来に対する危機感が、住民たちの目を自分たちが暮らす家や町並みに向けさせた」と、脇町南町町並み保存会会長をつとめる平田喜一郎氏は話す。

住民たちは建物の修理、整備に乗り出す。住民主体の活動であった。現在会員は110人で、80戸の一軒に1人は会員である。大学教授や研究者らが、町並み再生のために協力、支援する。脇町の町並み調査は、すでに昭和50年代に始まっており、町も住民運動の進展に呼応するように、町並みの再生保存を重視する。そして、市街地景観条例などを制定し行政としての取り組みを本格化させる。脇町の「うだつの町並み」は、1988年（昭和63年）に全国で28番目の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定される。

国からの補助による修景・修復対策が進められ、町は左官屋等職人の養成を補助してきた。木造建築の特徴である白壁塗り、漆喰壁、本瓦葺きは、専門の技術を有する職人を必要とするが、そうした職人は少ないからだ。

また、昭和初期の建築で劇場、映画館として利用されてきたオデオン座を買い上げ、芝居、映画、箏曲、舞踊など多目的に活用することにした。劇場は、1996年（平成8年）山田洋次監督の映画「虹をつかむ男」の舞台になったことで知られ、もうひとつの観光名所となった。電線の地中化や道路整備も進んだ。保存地区に選ばれたことは、住民の意識を高め、周辺のひとたちの関心をも次第に

高めていった。

脇町の中学校の校舎は、本瓦葺きの屋根である。川をはさんで南町の向かいに建つショッピングセンターも、土蔵造りで、景観との調和が配慮されている。うだつは、まちづくりのテーマになった。2000年（平成12年）、脇町を訪れた観光客は、27万人に達した。

うだつの町並みを守るひとたち

漆喰塗りの白壁と格子造りの町並みがつづく脇町南町。格子造りは、説明によれば「細かい角木を縦横に間を透かして組み合わせ、窓や出入り口に取り付け」られた。また、格子組みの裏には板が張られている。日光をさえぎり、風雨を防ぐ戸で、昼は内側に収納しておき、夜はおろす。蔭戸と呼ばれる。虫籠壁は漆喰で塗り固めた格子様の窓である。江戸から明治の個性的で、美しい町並みが残る。

吉田家住宅は、脇町を代表する藍商であった佐直吉田家で、母屋と藍蔵など5棟の建物それに中庭がある。近年、建物を改修し、有料で公開している。建物と展示物それ自体がもちろん歴史的資料であるが、一角が資料室になっていて、映画館をイメージするスペースでは映像で脇町およびその周辺を紹介している。住民の間には、「設計は東京のコンサルタント、建築は徳島。地元の風土に根ざしていない」とのきびしい声があるが、集客、情報発信で一定の機能を担いつつあることもみのがせない。



藍商佐直吉田家住宅

脇町南町町並み保存会会長の平田喜一郎氏宅は、築約130年になる。江戸末期の寛永年間から明治時代はじめに建てられたという木造住宅は間口が狭く奥に長い家で、「木五旅館」の名で父親の代まで旅館を営業していた。「不便さもあるが、その不便さと上手につき合いながら、家を守つ

ていきたい」，と平田氏は言う。

住人として町並みを保全する人たち，そしてこの町から情報を発信し，町への関心を広めようとするひとたちがいる。住民によるボランティア観光ガイド・脇町うだつの町並みウェルカム観光ガイド連絡会は，1996年（平成8年）7月に発足した。ガイドをつとめるのは主に退職した元教員や会社員，女性らで，年間数百回のガイドをおこなっている。1998年の派遣回数は，700回近くにのぼった。知識と話術を磨くために，自主的に研修会を開催したり，後継者養成の勉強会を開いている。

地域の暮らしや文化に根ざした事業開発もみられる。保存地区での商業活動は事実上抑制されており，開発や進出に歯止めをかけている。筆者が調査した2003年春の時点では「まちおこしの店」は5軒であった。その後，第三セクターふるさと脇町株式会社が運営するレストラン，物産販売をおこなう「道の駅」もオープンしている。食関連の店が主で，古い民家をそのまま活かしたり空き家を活用して，祖谷谷で知られる美馬地方などの伝統的な家庭料理である「そば米雑炊」を食べさせる店がある。吉野川流域の山村ではかつて，タバコを栽培しており，タバコの収穫を終えた畑には，そばを蒔いた。そばはそうした地域にあっては，貴重な食料であり，そば米雑炊はそばが生んだ食文化であった。「少ないコメを大切に食べる」水田が少ない山村の「貧しさ」が生んだ所産と言えるかも知れない。それがいま，「ヘルシーさ」と「郷愁」で観光客などが求めている。和三盆などの和菓子，すだちジュースなど，この土地らしい食や特産品も生まれている。



食を売る地域づくりの店

また，8月はうだつまつりや吉野川での花火大会のほか，徳島市で開かれる阿波踊りの期間中，脇町では一日だけ阿波踊りがおこなわれる。

家の所有者のなかには，最近戻ってくるひともし始めたという。まちおこしと

地域コミュニティの保全が結びついたうだつの町脇町。しかし、「観光客は通り過ぎるだけで、金が落ちない」という声もある。観光地としては地元には宿泊施設、駐車場が不足しているという課題を抱えているが、2003年4月吉田家裏の「道の駅」に大型バスを収容できる駐車場が完成したほか、宿泊施設としてはグリーンツーリズムの拠点にしている美村が丘があり、これとリンクさせた対応が進められている。うだつの町並みを、これからどのように活かしていくのか。観光でよみがえったうだつの町は、住民の住まい、暮らしの場を守りながらどのようにコミュニティを持続していくかが課題である。

地域資源は水。水が生み育てる産業と文化

福井県・大野市のまちづくり

400年以上のむかしから守られてきた水の循環システム

大野市は、白山山系に囲まれた盆地にある。「北陸の小京都」と讃えられる、大野城と町並みが美しい人口約4万人の町である。大野市はまた、豊かな水が湧く「水の町」である。市街地にあるほとんどの家が、井戸で地下水を汲み上げ飲料水・生活用水に使用している。市内の20ヶ所以上で、水が滾々と湧きだす。

水の町を知る景観が清水である。「しょうず」と読む。水にたいする感謝の心を感じさせる響きがある。湧水の町大野の象徴が、「御清水」（おしょうず）で

ある。1985年（昭和60年）、環境庁の「名水100選」に選ばれた。

市街地は、通りが碁盤の目に走り、整然としている。1580年代、天正年間にこの地方を治めた金森長近は、城下町の整備にあたりとともに水をまちづくりに生かした人物として知られる。



雪の日の「御清水」

金森は、飲料水を確保するため土木工事に力を注ぐ、そのひとつが「背割排水」と呼ばれる水路であった。各通りの真ん中に上水路を掘り、炊事・洗濯・防火・融雪に使用し、町屋の裏側の敷地と敷地の間に下水路を設けた。水を活かした城下町の設計がおこなわれていたのである。湧水の清水は、ひとびとの飲み水をはじめ生活用水となった。そして、内堀に利用されたのが、「御清水」の始まりだとされる。

「御清水」は、「臼」と呼ばれる湧き口から湧き出す。こんにちのそれはスチール製の円筒形で、そこから1日500トンの水が湧き出す。町内の管理委員会が維持管理している水は、長く市民の生活用水として使われているが、この水は使用する場合のきまりがある。水が湧き出すところのきれいな水は飲み水や調理用に汲み上げられる。次は炊事用、洗濯用と分けられている。金森の時代からこんにちに至るまで400年以上にわたり続く、伝統的な「御清水」の利用法だ。水を多面的に利用する、「水の循環系システム」が、そこにある。

「御清水」の周辺はいまでも、朝夕になると、女性たちが食事の支度や洗濯に集まってくる光景が見られる。夏の水辺は、子どもたちにとって遊び場であり、大人も憩う。その場に出合った観光客は、水とともにある伝統的な暮らしを知る。七間通りの古い町並みの至るところに、湧水の“ポケットパーク”が整備されていて、のどを潤すことができる。「山あいの小京都」大野市で展開されているのは、水を暮らしと観光に活かすまちづくりである。

地下水なしでは、7割の家庭が飲料水は井戸水。水は観光も支える

2002年11月、「御清水」に近い泉町にある老舗旅館に宿泊した。かつての武家屋敷跡に建ち、大野城を望む旅館の庭には水が湧き出す池がある。その池には、国の天然記念物イトヨが生息する。大野は陸封型のトゲ魚イトヨが生息する南限なのだ。水がきれいなところに棲む魚は、水環境のバロメーターである。「煮炊きなどの料理や飲み水は、すべて地下水。井戸を掘って、地下水を汲み上げている」のだ。女将に頼み特別に入らせてもらった調理場では、水道の蛇口

から勢いよく水が出ていた。従業員の女性は、「水がまろやか。夏は冷たく、冬あたたかい、使いやすい水」と美しく豊かな水のまちに住む幸福を語る。

大野市の中心部では、7割の家庭が地下水を汲み上げて利用している。工場、学校、官公庁だけではなく、ほとんどの一般家庭が自家用水道として井戸を持っている。ここでは、5.5メートルから10メートルほど管を打ち込めば、水が湧き出す。水温は年間を通して13度から15度、水質がよい。井戸を掘ってパイプを打ち込み、ホームポンプを取り付ければ、あとは「水の使用量はタダ」なのである。

上水道の普及率は、大野市では簡易水道をふくめて35%前後である。簡易水道を除くと、普及率は15%程度に過ぎない。しかも、そうした上水道や簡易水道の水源もまた、伏流水、地下水なのである。市民の暮らしが、それだけ井戸・地下水と深いかかわりのうえに営まれている証しでもある。

市の中心部に「平成大野屋」を掲げた建物が建つ。市民と行政が共同出資で



造り酒屋南部酒造



「大野の町を売る」平成大野屋

1999年（平成11年）10月に設立した観光拠点施設で、洋館の建物には、豊かな水が生んだこの地方の特産、産品が並ぶ。多くの特産品に共通するキーワード是水である。

豊富な地下水は、この地方の産業を育ててきた。酒造をはじめ、水が用いられる業種は多い。地元特産品や郷土料理には、「名水」と銘打ったものが目立つ。名水そば、名水豆腐、名水使用のでっち羊羹、「きれいで豊かな水」が味がよいものをつくる。豆腐の詰め合わせはギフト用品として人気だ。「名水」の地で育てられ、名水で煮た里芋が、名物になっている。平

成大野屋は、「地元の活性化を目指し、地元情報を全国に発信する施設」で、幕末の大野藩再建に重要な役割を果たした藩営商店の名にちなんでいる。地元の食材にこだわったレストランのメニューにも、水が登場する。水がこの町の地場産業や観光関連産業のすそ野を広げている。

豊かな水資源、それは天の利、地の利

大野市の市民が水の恩恵に浴しているのは、盆地の上に住んでいるおかげだといわれる。九頭竜川、真名川、清滝川、赤根川という4つの川が町を流れ、市街地は扇状地の上にある。町は地下に「ダム」を抱えたような形になっている。岩盤の上には砂礫層があり、多くの量の地下水をたくわえることができる。言い方を換えれば水の上に浮かぶ“水上都市”が大野の町である。地下水は、「河川の水より水がきれい」で、年中水温が一定している。水質がよく、夏冷たく冬あたたかい。したがって、水道の原水として、地下水を優先して使っているのが大野市民である。上水道が普及し、生活様式が変化していくのにもない、「水道は文化のバロメーター」という信仰が生まれ、水資源を河川に求めていったのが、日本人の水利用の歴史でもある。地下水を求めて「工場地帯が河口に近い都市周辺部に立地され」大量な揚水は「地盤沈下」を招き、「地下水源が枯渇し、川の水源がつぶされれば新たな資源が必要になり」、ダムを建設してきた⁽⁹⁾。

『日本の水資源』（平成11年版 国土庁長官官房水資源部）によれば、1996年（平成8年）における地下水の年間使用量は約146.6億立方メートルと推定されており、依存度が高いのは関東内陸、東海、四国で、とくに関東内陸は全国平均の2倍以上となっている。用途は1位が「工業用水」、2位は「農業用水」3位が「生活用水」の順になっている。

「開発は地下水の循環を断ち切る。アスファルト舗装の道路は雨水の地下への浸透を遮断し」水の循環系に影響を与える。宇井純氏によれば、農業による地下水汚染が1970年（昭和45年）頃に、濃尾平野で広く確認され、その後東京、

(9) 富山和子『水と緑と土 伝統を捨てた社会の行方』p71

兵庫県などでトリクロロエチレンによる地下水汚染が井戸から発見される。

1987年（昭和62年）6月、総合保養地域整備法、いわゆるリゾート法が施行され、和歌山県の燦黒潮リゾート計画をはじめ全国の都道府県がリゾート開発構想を打ち上げた。そして、「金太郎飴」開発といわれたリゾート開発は、ゴルフ場がセットだった。これにたいし、住民の間からは「農業、化学肥料が、地下水や河川を汚染する」という声があがり、各地で反対運動が起きる。和歌山市の和泉山脈に計画されたフォレストシティ計画は、開発をめぐり大阪地検特捜部の摘発を受けてとん挫するが、ここでもゴルフ場建設は開発の柱のひとつであった。「地下水汚染は直接目に見えにくいので進行に気がつかず、汚染すると回復が困難だ」といわれる。「湧水は地下水が地上に現れたもので、地下水の水質がそのまま湧水の水質となる」からである。

近年、日本人の水にたいする関心が高まっている。水道水は飲料水でなくなりつつある。水はただではない、と考える消費者が増えている。そのような水への関心は、まず安心、安全、美味しいということがある。環境庁（現 環境省）が1985年（昭和60年）に全国各地の名水を募集し、応募があったなかから選んだ「日本の名水100選」も、きっかけにあげられる。近畿地方は13ヶ所、うち和歌山県は2ヶ所（和歌山市紀三井寺・三井水、中辺路町・野中の清水）が選ばれたが、100の名水のうち74は湧水だ。

1990年代に入り本格化したナチュラルウォーター、天然水ブーム。「湧水」「天然水」の名前で「水」を商品化し、「まちおこし・村おこし」に活かす市町村は多い。大野市の水を活かすまちづくりは、それらに先行していた。

水を守る 大野市における地下水保全の取り組み

「御清水」のそばに、「水の郷おおの」の看板がたつ。ここには、その日の地下水位が表示される。そして、水位が基準以下に低下すると注意報、警報が発令され、市民に節水を呼びかける。数値は、水の需要が増える降雪期の12月から3月までと、それ以外の季節では異なる。

大野市は、地下水の汲み上げによる大規模な地盤沈下は確認されていない。しかし、1965年（昭和40年）頃から徐々に地下水位が下がり、湧水が枯渇したり水脈が細くなり、1977年（昭和52年）と1984年（昭和59年）に大規模な井戸枯れが発生した。地場産業である織物業界などの工場用水としての使用、降雪時に車に積もった雪を融かすのに地下水を利用するなど市民の生活様式の変化にともない地下水の揚水量が増えたことが大きい、と市の担当者は原因を説明する。需要が増す一方で、ほ場整備にともない雨水の浸透量が減少、地下水の供給量は減ってきている。

大野市は地下水保全条例を持つ、1977年に制定した。「いのちの水は、融雪の便利さに優先する」と考えた結果である。地下水保全条例は、やはり飲料水の水源を地下水に依存している熊本市でも制定されており、「地下水は県民生活にとって不可欠の地域共通の貴重な資源」と位置づけられている。そして、過大な汲み上げは障害をもたらす、と指摘する。大野市は、市独自の地下水保全条例にもとづいて抑制地域を指定し、この地域内の採取者に届け出と節水に努めることを定めている。また、大口採取者に対しては、毎月使用量の報告を義務づけてきた。そして、違反した場合は、名前を公表することになっている。ただ、この“伝家の宝刀”は、抜かれた例はない。強い罰則規定はないのが実態だ。

市は地下水の涵養のために冬の間4ヶ月間、水田に水を張ったり、田を借り上げて人口涵養池を設け浸透実験に取り組んでいる。さらに、水源にあたるブナ林を買い取った、水源保全の大切さを市民に訴えるのがねらいだ。2003年には、地下水の保全管理のための総合調査を実施し、シミュレーションモデルの作成や管理計画を立案した。

大野の宝はみんなで考える 変わり始めた市民

地下水は大野の宝、水資源を資源と捉え保全を訴える市民たちがいる。2001年（平成13年）11月、大野の地下水を守る市民の集いは、「大野の地下水再生宣言」を採択した。「宣言」は、3つの柱である。① 市民の共有財産である地下

水を守るために、そのコストを負担し、節水と汚染防止に努める。② 大野の地下水源である真名川の水を取り戻すために、関係機関に働きかける。③ 50年先を見越して、現在の下水道工事の見直しを求め、大野にもっともふさわしい汚水処理の実現に向かって努力する、という内容である。市民を行動に駆り立てたのは、市の公共下水道工事が地下水脈に与える影響への懸念からであった。



七間通りにある水飲み場

大野の水を考える会は、情報紙『大野の水情報』を発行し、「水」に関する市民の発言の場を提供している。いろいろな意見が紹介され、様々な活動が展開されていることがわかる。「名水を飲みたいのか、地下融雪をしたいのか。地下水を残すのか、捨てるのか、市も市民も決断を」、市民は2002年1月の『水情報』で、こう

訴えた。学習会が活発に開かれ、こどもたちがおとなと川などをめぐる「水・探検隊」が実施されたりしている。地下水は町の宝であり、無尽蔵ではない。「価値があるものには金を払う時代、使用メーターをつける必要がある」、そう考え発言する市民が出始めた。行政だけに任せっぱなしにはできない。市民みずからが水という資源を暮らしの中であらためて捉えなおし、「水の町」として持続的な発展を考えていく取り組みの始まりと評価したい。これから市民と行政は協働して、どのような「水の町」の将来プランを描いていくのか、協働のあり方が重要になっている。

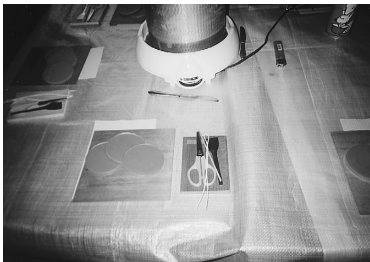
地域資産を掘り起こす。エコミュージアムの町は住民主体

山形県・朝日町

蜜ロウソクは析の森が生み出す

朝日町の最奥部、朝日連峰の山麓に、蜜ロウソク&体験工房「ハチ蜜の森キャンドル」がある。日本で初めての蜜ロウソク工房である、1988年（昭和63年）にオープンした。日本のロウソクは、漆やハゼの実で作る木ロウソクや松ヤニロウソクが一般的である。蜜ロウソクは、養蜂家がハチミツを収穫し、ミツをとったあとと不用になったミツバチの巣で作るロウソクのことをいう。蜜ロウソクの産業としての歴史は、日本にはなかったのである。

工房の経営者は、安藤竜二氏（1964年生）。都会に憧れていた青年だったが、23歳のときに出会った蜜ロウソクの「きれいな火を魅せられ」、蜜ロウソクの世界に入った。実家は養蜂業である。



蜜ロウ。安藤氏の工房で

「ハチ蜜の森キャンドル」は、ログハウスの木造2階建てである。建物の1階は入り口がキャンドルショップ、奥が仕事場になっている。安藤氏が作るロウソクは、棒状、丸形を基本に15種類あり、それぞれサイズの違う製品を揃える。販売はインターネットと卸販売が主で、一部工房など町内で土産用に販売している。

日本古来のロウソクや化学製品を用いたロウソクに比べて値段は多少割高だが、蜜ロウソクのめずらしさや香りのついたものなどキャンドルの灯にいやしを感じるひとたちのあいだで人気を呼んでいる。買うのは9割が女性で、理由は「灯して楽しい」ためとみられる。

建物の2階は、蜜ロウソクづくりが体験できるハチミツの森体験教室になっており、大人1500円、こども1200円、約90分で蜜ロウの作品ができあがる。

体験はそのほか、観察会や森の案内などがあり、これがヒットしている。「蜜ロウで食べていけるとは思わなかった」、と安藤氏は笑う。

工房で使用する蜜ロウは年間約 1200 キロ、朝日連峰の栃の森の花である。栃は花が咲くまでに十数年、採蜜ができるほど多くの花をつけるにはさらに数十年が必要なのだという。「花粉の色がそのままあらわれる」のが蜜ロウソクの特徴だ。起業に成功した安藤氏の挑戦。その施設とソフトは同時に、エコミュージアムの町の拠点のひとつなのである。

エコミュージアムと朝日町

朝日町は、山形県の中央部にある中山間地域である。朝日連峰の山並みを望む町の真ん中を、最上川が流れる、「美しい自然に包まれた」「リンゴとワインの里」である。しかし、1991 年（平成 2 年）に 1 万 417 人を数えた人口は、10 年後の 2000 年（平成 12 年）には 9,337 人と 1,000 人余りも減少した。高齢化率は 30% を超す。

日本のエコミュージアムは、この過疎と高齢化の町から始まった。エコミュージアムは、フランスのジョルジュ・アンリー・リビエル氏が構想、提唱したもので、1960 年代から 70 年代のフランスで成立した。1971 年（昭和 46 年）には、フランスで第 1 号のエコミュージアムとなるグランドランド・ミュージアムが開設されている。エコミュージアムが通常の伝統的な博物館と異なるのは、「ありとあらゆる地域資産（地域資源）が常設展示の対象となり、従来の博物館では展示の対象にならなかったり、なりにくいようなもの、あるいはもともと自然環境や生活の場にあってこそその意味が生かされるようなものが重要視」される。つまり、「地域がそのまま博物館」なのである。日本には、元埼玉大学教授で博物館学専攻の新井重三氏らによって紹介されてきた。新井氏は、その性格について朝日町におけるシンポジウムの基調報告で、日本語では「生態学博物館」「生活環境博物館」ということになるが、「生活と環境を守り育てていく博物館である」と述べている。⁽¹⁰⁾ フランス発の地域再生運動、である。

日本では、1990年代に入り、地域づくりの一手法として注目され、各地で取り組まれている。しかし、言葉が一人歩きし、似て非なるエコミュージアムも生まれている。そのため、日本エコミュージアム研究会は2001年5月に「日本エコミュージアム憲章2001」を作成した。それによれば、エコミュージアムは、「環境と人間との関わりを探る博物館システムで、ある一定の地域において、住民の参加により、研究・保存・展示を行う常設の組織であり、地域社会の持続的発展に寄与するものである」と定義している。対象は、「ある一定地域の多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的に対象とする」。そして、「住民と行政が協働し、住民の参画のもと、広義の非営利組織がおこなう。(以下略)」、組織としている。

エコミュージアムの言葉が、こんなにほど知られていなかった1988年、朝日町ではナチュラリストであるIターン住民の提案をきっかけに、議論が始まる。翌1989年に有志による研究会が発足、町は第3次総合開発基本構想・基本計画で、まちづくりの理念としてエコミュージアムの町を明記する。「わが町に住む人々がそれぞれこの町の文化や自然、生活に誇りを持ち、生かしながら、楽しく生き生き暮らせる生活スタイルの確立を目指す、楽しい生活環境観エコミュージアムのまち」、1991年（平成2年）のことだ。

町は、「エコミュージアムの町」を宣言し、中心地には看板が立った。町の指針となっている現在の第4次町総合発展計画（平成12年～21年）にも、「自然と人間が共生し、しっかりした暮らしを築くエコミュージアムのまち」として引き継がれている。

町の「宝が見えてきた」。宝探しは、地域資源への気づき

エコミュージアムの町づくりへー、朝日町の住民がまず始めたのは町を見直す、町にあるものを見直すことであった。朝日連峰に最上川、街道がとおる町。

✓ (10) 朝日町エコミュージアム研究会『エコミュージアム～地球にやさしい朝日町から～』p7

歴史、文化、風土や生活の知恵、山や川などの自然、農業などの産業を知ることであつた。そして、そこに生活するひとがあり、生活スタイルがあり、環境もある。住民みずから、地元を歩き、調査をする。「地元のことを一番よく知っているのは、地元のひと。そこで、生まれ育ったものが知っている」。これは朝日町方式の地元学なのである。



くぬぎ平の扇棚田

「あさひまち宝さがし」は、そうしたプロジェクトである。「宝物」を地区ごとに募集する、書いた「宝」はセンターに設置した宝箱に入れてもらう。ハガキを配布し、小学校には調査票を配った。寄せられた「宝」は730点にのぼった。自然、歴史、景観、建物、食、遊び、暮らし、ひと、民話、コミュニティ、健康、イ

ベント、産業…、それらはこどもから高齢者まで住民が誇りにしたい地域資源である。「宝」は、エコミュージアムカルタになった。カルタは町内の小中学生に贈り、そのカルタで今度はカルタ大会を開き、名人を選ぶ。1セット1,000円で一般に販売もしている。ひとつの「宝」はどんどん広がって、新たな発想を生み、つながっていく。こどもたちだけではなく、地区住民の「自然遺産・文化遺産を守り育てる」意識に働きかける試みだ。

宝物探しは、外部評価が大切だ、というのが関係者の考えである。外のひとに朝日町はどう見えるのか。そこに住んでいると、見えないことは少なくない。大学生などの声を聞くのは、そのためである。NPO 朝日町エコミュージアム協会と朝日町エコミュージアム協会コアセンターでは、月1回「宝紀行」というフィールドワークを実施している。「水と暮らしの探検隊」は、小学生の親子が毎年6月に町内を流れる川堰などでおこなう観察会だ。宝物を集めた検索システムづくりが進んでいる。CD-ROMを製作する。完成したら、各学校に配る。「宝が見えてきた」、朝日町で住民から聞いた声である。

朝日町のエコミュージアム

朝日町のエコミュージアムは、町内の広範囲にわたって展開する。2003年12月現在、17のサテライトがある。サテライトは衛星博物館や園と位置づけられており、朝日町のそれは朝日連峰の山や森、最上川などの自然、大庄屋だった農家建築、生産の場である棚田、特産のワイン工場やリンゴの関連施設などの産業資源である。また、核となる拠点はコアといい、町の複合施設「創遊館」内に設けられたエコミュージアムルームが朝日町ではコアセンターになっている。全体を掌握し管理運営をおこなうセンターで、スタッフは学芸員と2人のアルバイトである。エコミュージアムはこのコアとサテライト、そしてディスカバリー・トレイルが構成する。トレイルはそれぞれをつなぐ道で、「発見の小道」と名づけられている。「エコミュージアムで、ひとを呼び込みたい」と、NPO 朝日町エコミュージアム協会会長でもある安藤竜二氏は言う。2002年の朝日町の観光客数は32万2000人である。



朝日町エコミュージアム
コアセンター「創遊館」内



ぶどう園のなかの朝日町ワイン工場

エコミュージアムは、「みんなが学芸員」である。そこに住む住民が、「まちの案内人」なのだ。朝日町でガイドをつとめるのは、案内人の会。住民による自主的な活動グループで、1999年8月に発足した。来訪者は、コアセンターをとおして案内人の希望を伝え、手配してもらえる仕組みになっている。案内人は希望に応じて、現地に出向き、サテライトである地域資源について説明する。これは有料になっており、無料のボランティアとは違う。

案内人の会の会員は2003年10月現在19人、年齢は30代から80代、職業も放送局のアナウンサーから観光協会関係者、主婦

まで幅広い。専門的な知識を持っている郷土史研究者、NPO 関係者から“道先案内人”的なひとまでいる。

住民主導、行政などと協働で

朝日町のエコミュージアムによるまちづくりは、誕生以来住民主導で取り組まれてきた。それは、「住民と行政と専門家のパートナーシップを基本に、行政と専門家はそれぞれの立場から住民の活動を支援する」というエコミュージアムの考えに則っている。NPO 朝日町エコミュージアム協会もそうしたなかで誕生した。

NPO は、まちづくりを主体的に考え行動する住民らによって、1999 年に設立された。公務員、教員、町職員、農協職員、サラリーマン、そして自営業の住民ら 25 人が参加した（現在 40 人）。

日本最初のエコミュージアムの町は、まちづくりに積極的に活かしていこうというひとたちと一般住民の間に、“温度差”があるのは事実である。町は、コアセンターのスタッフ給与などとして補助をしているが（2003 年度は 200 万円）、その行政にたいして「町はまだまだ住民に任せっぱなし」という批判もある。

会長の安藤氏は、「自分たちは何をやりたいか、何を大切にすべきか、がわかっている。今後、教育以外の観光や産業に生かせるものがある」と話す。今後、所有者サテライトの会や、利用者とちょっと関わりたいひとたちを組織化して、エコミュージアムクラブのような組織も結成したい考えだ。「地域特性と開発の道」を探り、「地域の発展に貢献する人材を養成」する事業である。そうして、住民の多角的で、多様なニーズに応えようというのである。

「住民と行政が協働で協力してやっていく。5 年後、10 年後を期待してください。宝をいっぱいさがして、自分の心にもそうしたものをもっている」。市町村合併問題など、地域社会が揺れ続けるなかで、安藤氏は心配していないと言った。

自分たちの暮らしは自分たちの力。地域力を育てた地域づくり

京都府・大宮町

生鮮食料品、日用雑貨から「心」まで売る百貨店

生鮮食料品、日用雑貨から「人情」「真心」まで売る百貨店がある。京都府大宮町にある常吉村営百貨店である。売り場面積わずか 25 坪、駐車場のスペースを加えても 30 坪余り（100 平方メートル）足らずの小さな百貨店である。「何でもあるから、百貨店なのです」、代表取締役社長大木満和氏の言葉だ。

店舗はログハウス風の木造、入口のうえに日本語と英語で「常吉村営百貨店」の看板が掲げられている。店内の棚や台に、商品が整然と並ぶ。鮮魚、肉、野菜、コメ、加工食品、日用雑貨、介護用品、事務用品から衣料、農機具まである。こんなものまであるのか、という声も聞く。日常生活に必要な買い物は、ほとんど

ここで事足りる。品数の豊富さは、この百貨店の特徴のひとつになっている。「食料品、縫製など、いろいろな職種のひとの知恵袋の結果」である。

地産地消はこの店の特徴だ。農作物は地元産が多く、野菜は地元の高齢者が無農薬で育て、朝畑で採ってきたものが売られる。水菜、黒豆、シイタケ——、生産者である高齢者にしてみれば、「自分が作り、消費できない農作物を持っていけば、お金が入ってくる」。現金収入は高齢者の生きがいになる。現在、百貨店に農作物などを出荷している人は 75 人前後、そのうち 90% は 70 歳以上の高齢者である。他方、消費者には「新鮮さと安全性」が



常吉の集落



常吉村営百貨店 品揃え豊富な店内

魅力だ。

百貨店は、店舗の近くに農作業受託部会作業場を所有している。高齢化や後継者がいない農家と農作業の受託委託契約を結び、26人の田畑を管理している。隣接する畑のビニールハウスでは、エゴマや季節野菜の栽培、農家に委託して水菜の減農薬・堆肥栽培に取り組む。大宮町の水菜は、鍋物用よりもサラダ菜として消費者に人気がある。百貨店では今後栽培面積を増やして生産量を拡大し、常吉ブランドの水菜に育てていく方針だ。

この店の3つ目の特徴は、宅配サービスやクリーニングの取り次ぎもおこなっている点である。交通手段がないなどの理由で買い物に来ることができない高齢者などには、商品を自宅まで配達している。地区内に限り、配達料は無料だ。

入口横には休憩所が設けられている、買い物に訪れた高齢者や住民がひと休みし、会話をする場である。ひとがふれ合い、村の情報が交わされる場でもある。そして、この店の4つ目の特徴は、この常吉村営百貨店が下常吉地区で、ただ一つの商業施設だということである。

まちづくりは、人づくりから始まった

京都府中郡大宮町、大宮町は京都府北部丹後半島の入り口にある人口約1万1000人の町である。「丹後ちりめん」と、良質のコメの産地として発展してきた。

この町が人材育成の取り組みを始めたのは、1980年代半ばにさかのぼる。過疎、高齢化が丹後地方でも進行するなか大宮町の人口はわずかながら増え続けてきた。しかしながら、コメどころでも1960年頃から兼業農家が増加するとともに荒れた農地が目立ちはじめ、ほ場整備も進まなかった。ある地区では後継者難で、10年後には60軒の農家が半分になるという予測がでた。伝統産業である織物業界の落ち込みも激しい。製造出荷額は1970年、71年をピークに減少、最盛期に5,000台を数えた織機は現在1,500台、織物業者は約400社となっている。山間部にある集落では、65歳以上のひとの割合が40%を超えた地区もある。「こんなまちはいやだ」、若者の間からはそうした声が聞かれた。

町の将来をどうするか。町、町商工会、町農協は共同で出資し、個人会員も募り、市町村塾「羽ばたく大宮若者の会」（通称JOY）を組織した。竹下首相当時におこなわれた「ふるさと創生1億円基金」のほとんど、かなりの額が人材育成にあてられた。さらに1992年（平成4年）には、「大宮活性懇話会」を設立する、会員は10人である。月一回の勉強会は「毎回8時間から10時間というハードな内容」となり、しかも年6万円の会費は個人負担であった。町は、そうした組織を基盤にして、先進地視察のほか民間のコンサルタント業者らを招いて勉強会を開催したり、住民レベルでのワークショップを活発に開いた。「これからの町のリーダーを育成する。地域づくりに頑張るひとを育てる」のが目的であった。

当初は「ひとつにならず、10年ほどは軌道に乗らなかった」。しかし、人材育成事業によって蒔かれた種は、やがて何人もの地域づくりに積極的に関わるひとを生み出すことになる。

“わが村活性化計画”の費用は、一地区470億円になった

1995年（平成7年）、大宮町は町内の各集落に「村づくり委員会」の設置を働きかけた。「まちづくりは住民の手で」というメッセージであった。危機感を深刻に受け止めた町が選択したのが、村、つまり集落ごとの地域社会再構築の試みであった。

町担当職員は、各集落に出かけて、住民に趣旨を説明して回った。町行政に対する批判、風当たりは想像以上であった。「役場のもんが来た、役場は信用できない」、役場職員は住民の間にある「行政への強い不信感」を知った。当時、まちづくりと言えば「農林課だけがやっているような状況」だった。町職員は地区に何度も足を運び、話し合いを重ねた。「何もしないでいるのか。住民参加の計画作りをしよう、役場も汗をかこう」。これにたいし、住民も職員の姿勢に少しずつ胸襟を開いていった。『『念ずれば花開く』、の心境でした』、率先して地区の組織化のために奔走した当時の町民課長（現在町議会議員）中西敏行氏は回想

する。16集落のうち人口が増加している中心部をのぞく12の集落に、村づくり委員会は組織される。

村づくり委員会の核になったのは活性懇話会の委員だった。メンバーは40歳代半ばの男性が多く、当初は「仕方なく」参加するひともいた。商工業者、サラリーマンが大半で農業関係者は2割程度にとどまった。委員会の設置にあたり大切なことは、集落において、委員会が“地域塾”と認知されることであった。中西氏らは区長を集めて理解を求め、区長会もそれを了承した。

各委員会は、それぞれワークショップを開いた。意見を出し合い、住民は自分たちが住む地元と向かい合う。ほとんどの住民にとって、それはそれまでに経験したことがない作業だった。リーダーは、“ひとづくり塾”で学んだ住民であった。足もとの課題が少しずつ、はっきりと認識されていく。住民みずからが考える地域づくりである。

村づくり委員会は、各集落にある地域の力が問われる。住民の問題意識や提案などが、具体的に示されるからだ。まさに、「地域の知恵比べ」だったのである。各委員会は、“わが村の活性化計画”をまとめた。「地域づくりがハードからソフトへいう流れのなかで、大宮町はソフトからハードだった」、と中西氏はふり返る。

470億円、という数字がある。この数字は、村づくり委員会が策定したプロジェクトの実施に要する金額である。費用は12集落をあわせて、ではない。あるひとつの集落で、住民から出されたプロジェクト農村環境アメニティ計画をまとめてみると、その額はなんと470億円にのぼった。「住民みずからが足もとを見直した」「夢のプロジェクト案」である。このエピソードを教えてくれたのは、中西氏である。

村づくり委員会と行政の役割は、次のようになる。集落の委員会は、プロジェクト案を行政に提出する。提言は、道路、トンネル、ほ場、浄水場の整備や建設など多岐にわたる。行政は、これを受けとめて検討し、各委員会の提案で適当と判断したものに対応する。その代わり、住民も言いつばなし、提案しつばなしで

はなく、みずからも用地確保をはじめ事業の実施に責任を持つ、というものである。その結果、トンネルや浄水場などが整備された。「6 ヶ月で事業着手されたものもある」。いくつもの提言が、行政に取り入れられている。

一般会計予算が 40 億円余り（2002 年度当初）と財政規模が比較的小さな町で、それだけ多くの事業が執行できたのは、国の中山間地域にたいする特別事業や補助整備事業、ウルグアイランド関連事業など、国の農林・建設・環境各省（当時）や京都府の事業費の積極的な獲得と活用による。住民との協働は、町の職員とも鍛えたということができる。

百貨店は、住民の知恵と地域の力で運営

常吉村営百貨店は、有限会社である。1999 年 12 月に、地域住民 33 人が資本金あわせて 350 万円を出資し、設立した。住民が出資し、住民によって運営されるのが常吉村営百貨店なのである。



浄水施設 これも住民提案で完成

大宮町は、町の面積の 7 割以上を山林が占める、中山間地域である。百貨店がある常吉地区は、町内でもっとも奥の山間部にあり、水田や畑が広がる。1996 年、そののどかな集落で“事件”が起きる。農協、JA の統合による京都丹後常吉支所の廃止計画が、表面化したのである。住民の間からは、反対の

声があがった。農協支所は「地元農業の生産の拠点」であるとともに、唯一の商業施設でもあったからだ。しかし、結局支所は閉鎖される。そのとき、住民たちが考えたのが、商業施設—現在の村営百貨店—をつくることであった。「地元のひとの生活の拠点づくり。ひとびとが語らい寄りどころとする場所、そして農業を考える場所を」、それが大木氏たちの目的となった。

常吉地区は人口約 580 人、この 20 年間で 100 人が地区を離れていった。4 人

に1人以上は65歳以上、高齢化率は30%に迫る。商店がある町までは、約4キロメートルある。村営百貨店創業の中心になったのは、下常吉村づくり委員会であった。「村には、物を買うところがない」というこどもたちの声を聞いた。高齢者は「学校も農協もなくなった。常吉はあかん村になってしまう」と言った。

村づくり委員会委員長でジーンズショップを経営する大木氏らは、村営百貨店計画を発表する。反対の声は出なかった。大木氏らには「地域のひとたちとのコミュニティをもってきた」実績があった。ジャズコンサートの開催、祭事の復活といった活動を通して、村づくり委員会の認知度を高めてきていたのである。

行政に頼らず自分たちの手で店をはじめることに決めた。「補助金に頼ってはダメ。自分で金を出したら真剣になる」。その年の10月出資者を募集したところ、33人の有志が350万円を出資した。農協は、土地を提供し300万円を出した。その結果、農協支所の跡地に、それまであった建物を改装して1997年12月9日に開店したのが、村営百貨店である。

社員は店長と交替で勤務するパート女性2人、役員は6人で、代表が大木氏、専務は元スーパーマーケットの経営者、それに農業経営者ら。代表と専務は無給である、大木氏は家業のジーンズショップは「奥さんにまかせっきり」で飛び回る。町内にある大型小売店などの競争もあり、百貨店は「赤字経営」が続いている。初年度の1999年度に3,800万円だった売り上げは、2002年度が3,300万円と伸び悩んでいる。「農作物は好調だが、一番役に立っている食品、日用雑貨などがもうひとつ」なのだ。活路をどう切り拓くか、模索が続く。

「百貨店ができて、一番喜んでくれたのが高齢者。高齢者が作り、それを高齢者や地域住民が買いに来て、規模は小さいが循環型農業ができているように思う。地域のひとが少しでも元気になり、お金を稼げるシステムができればいい。こどもたちには『常吉はいいなあ』と思ってもらえるような、安心して暮らしていくことができる地区でありたい」。

地域コミュニティをみつめる取り組みが次々と

常吉村営百貨店の取り組みは続いている。農業生産法人としての認可を受け、地域の活性化をめざすイベント——たとえば楽農朝市やパンプキンフェスティバルなど——も活発に開いている。住民の意識や関わり方に差があることは事実だが、百貨店は、地区住民になくてはならない買い物場所、日常生活の一部となり、「元気づくりの拠点」になりつつある。大木氏は強調する。「地域は自分たちで守っていく時代になり、地域の活力が問われるようになった。わたしたちは農業と福祉と暮らしを大切にしていきたい」。農業と福祉と暮らしが元気になる百貨店経営である。

地域社会はこれからも少子高齢化が続き、過疎化が進む中山間地は依然、農林業をはじめ将来展望が描きにくい。基幹産業であった織物業を取り巻く環境もきびしい。そうしたなかで、「高齢者やこどもたちが希望を持って住み続ける地域社会」を、どのように実現していくのか。村づくり委員会が重視しているのは、地域の生活基盤を支える農業の役割、機能の再認識である。それは、たとえば農作物作りを通して、高齢者が地域づくりに参加し、地域における自分の存在を意識し自信を回復していく取り組みにあらわれている。また、百貨店がおこなっている、買い物に来ることができないひとたちにたいする無料宅配サービスや声かけ運動は、一人になっても暮らしていくことができる安心・安全ネットワークの確立である。ひとと地域をつなぎ、地域の力を高める取り組みである。地域づくりの拠点、それが常吉村営百貨店なのだ。



谷内ファームの「畔蔵」

大宮町の地域づくりの取り組みは、常吉地区だけでない。いくつもの取り組みが生まれている。農業生産法人は、常吉村営百貨店のほかに谷内ファーム、明田ファーム、大宮さくらんぼ園などが設立された。谷内ファームは常吉と同様に谷内集落の住民が出資してつくっ

た会社で、国道沿いに店を構える。名前は「畔蔵」、蔵をイメージさせる店内では、住民が作っている加工品や地元産品を販売しており、店の奥には加工場を備えている。グラウンドは朝市会場にもなる。

行政主導で始まった大宮町の地域づくりは、住民と行政の協働の時間を経て、住民主導・行政支援にと変わりつつある。「集落レベルの地域単位の住民組織が『自立的責任主体』になるためには、きめ細かな市町村の支援政策が有効性を持つ」。「集落単位などの『主体形成』が中山間地域市町村を『自立的責任主体』に変革する基礎となる⁽¹¹⁾」。多田憲一郎氏が指摘したように各集落は、村づくり委員会を中心に地域づくりに取り組むことで、力をつけてきたのである。市町村合併への対応が進むなかで、「新市になっても、行政に物申せる組織をつくっていきたい」、この町の住民の間からはそうした声が聞こえる。

むすび

「あなたらしさ」、「わたしらしさ」というときの「らしさ」には、そのひとをそのひとたらしめているそのもの、という意味がある。他者とは違う二つとない存在としてのそのものとは、「固有さ」であり、「個性」であり、それ自体を特色づける。本来アイデンティティにかかわる「らしさ」を喪失したのは個人としてだけでなく、わたしたちの生活の場である地域社会もそうだった。

失いつつあるものの価値に、いち早く気づいたひとたちがいる。そうしたひとたちがいるところでは、地域固有の資源を掘り起こし、地域づくりに活かす取り組みを展開してきた。「らしさ」の再構築による地域づくりである。

古いものが次々に壊されていくなかで、歴史的環境や文化にあらためて注目し、地域の再生に結びつけていこうとする取り組みがある。たとえば徳島県・脇町や、本論文では取り上げなかったが愛媛県・内子町の歴史的な町並みを活かした地域づくりは、代表的な事例である。また、福井県大野市の取り組みは、湧水という水資源と伝統的な文化にもとづくまちづくりである。

(11) 多田憲一郎「中山間地域の振興と主体形成」(『経済9 2002 No.84』) p74

個性や特性に裏付けられた地域づくりは、民間の起業を促し、観光をはじめ地域経済に活力をもたらしている。愛知県・足助町は、過疎化という困難な問題に向かい合うなかで、観光の町として地域を活性化し、さらにその基盤となるコミュニティの再構築に取り組む。朝日町のエコミュージアムのまちづくりは、住民がみずから地域を捉えなおし、地域全体で地域資源をまちづくりにつなげようとしている。いずれも、自然環境や歴史・文化資源を保全しながら、地域全体で考え、活かす方途を探っている。「らしさ」の追求による地域再生の取り組みということができる。

市町村合併に向けた動きが、進んでいる。大宮町は本年（2004年）4月に6町が合併し、京丹後市となる。脇町は吉野川流域の美馬町、穴吹町、木屋平村と一緒に、2005年（平成17年）1月1日に美馬市となることが決定している。足助町は2005年3月を目途に豊田市などとの合併の検討が合併協議会で続いている。市町村合併によって、これまで以上に地区ごとの地域づくりの取り組みが必要になってくるものとみられる。

少子高齢化社会、グローバル社会が進むなかで、地域力を磨き、地域コミュニティをととのえ直していく地域づくりが、いま目立つ。地域社会の存亡の危機が強まっているからだ。「コミュニティを引き継ぐといいが、いなかといえどもバラバラになる危機を抱く。地域がひとつになる、そうした取り組みが必要」。自立する人たちとの協働、ネットワークのなかで、あらたな可能性が探られなくてはならない。そうした意味でも、京都・大宮町の「住民組織の機能の重要性に着目⁽¹²⁾」した、住民参加型地域振興策は注目される。足助町の地域・集落の地域づくり計画の作成も、「住民が自分たちでやれることはやっていこう」という取り組みである。

地域づくりを進めるなかで、「らしさ」をどのように認識し、掘り起こしていくのか。地域固有の財産を活かしつつある地域と活かし切れていない地域のちがいは、住民の「気づき」や知恵がどれだけ結集されているかということであ

(12) 多田憲一郎「中山間地域の振興と主体形成」（『経済9 2002 No.84』 p73）

る。それは、「意思決定のプロセスシステム」の確立とも深く関わっている。地域再生の可能性はそうしたなかから、追求されていく必要があるのではないかと考える。

引用・参考文献・資料

- ・『新・三州足助』足助町観光協会 1996年3月20日
- ・『現代のまちづくり 地域固有の創造的環境を』池上惇 木暮宣雄 大和滋編 丸善ライブラリー 2000年9月
- ・『歴史的環境 一保存と再生一』木原啓吉著 岩波新書 1982年12月
- ・『コミュニティパワーの時代』藤澤研二著 水曜社 2003年11月
- ・『エコミュージアム ～地球にやさしい朝日町から～』朝日町エコミュージアム研究会 1995年6月
- ・『地域再生の経済学』神野直彦 中公新書 2002年9月
- ・『水と緑と土 伝統を捨てた社会の行方』富山和子著 中公新書 1974年1月
- ・『水の文化史』富山和子著 文芸春秋 1980年
- ・『リゾート列島』佐藤誠著 岩波新書 1990年
- ・『日本ゴルフ列島』谷山哲郎著 講談社新書 1991年
- ・水資源白書『日本の水資源』（平成11年版 国土庁長官官房水資源部編）
- ・『エコミュージアム研究 No.7』「日本エコミュージアム憲章2001作成の経緯」大原一興 pp46～47
- ・『経済2002 9 No.84』「中山間地域の振興と主体形成」多田憲一郎 新日本出版社